協働性を取り入れた陶芸授業の開発

－　図画工作・美術科授業における対話的な陶芸授業を目指して　－

原山健一
（奈良教育大学　美術教育講座（陶芸））
長友紀子
（奈良教育大学附属中学校）

Development of Ceramic Art Subject that Incorporates Collaboration:
Aiming to make interactive ceramic art lessons on art subject

Kenichi HARAYAMA
(Department of Fine Arts Education, Nara University of Education)
Noriko NAGATOMO
(Junior High School attached to Nara University of Education)

要旨：本研究は、新学習指導要領で示されている「対話的」という部分に注目した、協働の要素を取り入れた図画工作・美術科教育における陶芸題材開発についての研究である。小学生を対象としたワークショップである「Clay session －つながるやきもの」と、中学校美術科授業での題材である「山を作る－陶芸で表現する物語」という、協働の要素を取り入れた２つの陶芸題材の実践を通じて、アイデアの展開など、いくつかの点において、協働による学びの深まりが確認された。

キーワード：美術教育　Art education
陶芸　Ceramic art
主体的・対話的で深い学び　Active learning
協働・コラボレーション　Collaboration

１．はじめに

新学習指導要領では、その基本的な考え方として、「主体的･対話的で深い学び」という考え方が示されており、図画工作・美術の授業においてもこのような視点での授業の構築が求められている。

この動向に対応した図画工作・美術科授業における陶芸授業開発の研究として、奈良教育大学で陶芸を指導する教員である筆者と、奈良教育大学附属中学校（以下附属中学校と記述）で美術を指導する第２筆者の長友は、2019 年度に「自然との関わりを取り入れた陶芸授業の開発 －中学校美術科における深い学びを生む陶芸授業を目指して－」という研究を行なった。この研究では「It's a small world~ 楽焼でつくる小さな世界 ~」と題した題材を通して、色や形を意識して器を制作するという美術科における一般的な学びだけでなく、器の内側に自然を取り込んだ箱庭的な「小さな世界」を作る事で、身近な自然を通した思考の深まりを生み出す効果が確認された。

陶芸は食生活や住環境といった他の分野との関わりを持ってきた分野であり、2019 年度の研究はその陶芸の特性を活かしたものであると言える。本年度の研究では、前年度の研究とは異なる陶芸題材の可能性として、新学習指導要領で示されている「対話的」という部分に注目し、協働の要素を取り入れた題材の開発について研究する事とした。

陶芸題材を通じた協働には、次の２つの有効性が考えられる。１つ目は陶芸が素材を手で直接扱う表現分野であり、粘土の触感を感じながら制作をするという点である。粘土に触れるという非日常的な触感体験を共有することで、児童・生徒の間に協働を促進する様な心理的影響が起こる可能性が考えられる。２つ目は粘土という素材が、乾燥硬化するまでは自在に形を変える事ができるという点である。この素材の特性の為、複数の作者で１つの作品を作る事が容易であり、成形の工程における協働がしやすい事が考えられる。本研究ではこの様な想定について、２つの実践事例を通して検証してゆきたい。

本研究は第１筆者である原山と第２筆者である長友からなる研究プロジェクトによるものである。本稿の執筆･校閲等は全構成員で担当し、執筆を分担した箇所の末尾には筆者名を記すこととする。（原山）

２．本研究の背景

２．１．陶芸分野における協働の事例

新学習指導要領には「対話的な学び」という考え方が示されていて、他者との対話や協働の重要性が述べられている。陶芸分野においても様々な形で協働の要素が存在しており、ここでいくつか取り上げてみたい。

現代では「陶芸家」という呼称が頻繁に使われ、個人で工程が完結する制作形態が多くみられる様になったものの、それと同時に「窯元」と呼ばれる複数人で工程を分担し中量生産する工房や、更に機械生産を取り入れ大量生産をする「製陶所」と呼ばれる陶磁器工場といった、協働により作品を作り出す制作形態も多く存在する。重要無形文化財（人間国宝）の制度においても、陶芸家個人が認定されるだけでなく、有田焼の柿右衛門製陶技術保存会の様に団体として認定されるという事例も見られる。この様に分業での作品制作が行われているのは芸術としての側面に加え、産業としての側面も併せ持つ陶芸という分野の特徴である。また、陶芸は作品を形作る成形の工程だけでなく、原料の精製から窯の焼成までの長く複雑な工程があり、それぞれの工程で高い専門性が必要である事も、分業の必要性を生み出す要因である。この様な分業というあり方も、もちろん協働的であると言えるだろう。

陶芸に使われる設備の面でも、例えば現代でも使われる「登り窯」で作品を焼成する場合は、一回の窯で一人の陶芸家では作りきれないほどの多くの作品の焼成が可能であり、かつ焼成には長い時間と多くの人手が必要であるため、必然的に数名で一緒に窯に作品を入れ、協働して窯焚きの作業をする事となる。昭和 40 年代に煙害が理由で登り窯の使用が禁止されるまでの京都では、この様な共同窯の使用が日常的に行われており、多くの陶芸家がこの様な共同窯を使用して作品を作り上げていた。

海外に目を移すと、「アーティストインレジデンス」や「シンポジウム」といった名称で、国内外から陶芸家を 10 人程度招聘し、数週間から１ヶ月程度の期間滞在しながら作品制作やスライドレクチャーなどをするイベントが多く行われている。こういったイベントは陶芸家同士や地元住民との交流の場である他に、アシスタントとして参加する学生にとっての学びの場ともなっている。この様なイベントは、陶芸家同士が競い合うのではなく、それぞれが持っている技術をお互いに学び合い、共に陶芸の世界を発展させようという協働的な意識のもと行われている。

また陶芸の素材や技術の面に視点を転じると、陶芸制作は美術科で扱われる題材では珍しく、道具を用いず手で直接素材を扱う作業が多い。道具を多く揃えなくても、陶土があれば制作ができ、この様な面でも美術科の教材として生徒同士の協働を取り入れやすいと言えるであろう。

２．２．協働を取り入れた陶芸題材の先行研究

協働性を取り入れた陶芸授業の先行事例として、和歌山大学の寺川剛央氏らによる「中学校美術・陶芸授業における共同学習の取組」という 2018 年に行われた研究がある。

寺川はこの取組を「大学と附属中学の教員が協働して実施した中学校２年生を対象とした美術の陶芸授業の取組」[(1)]としている。この研究は大学と附属中学の教員、また教育担当心理士が協働した授業の企画立案が主なテーマであり、行った授業にも生徒同士の協働の要素が取り入れられている。授業の内容は４人１組の班で４色の陶土をマーブル模様ができる程度に適度に練り合わせ、円筒状に成形した後、コースター状に薄く切り、各々の作品にするといった内容である。

寺川はこの授業について「お互い意見や感想を言いながら、順番に交代して菊練りの作業を行った。上手下手の差が目立たない作業課題を班員で共有する時間は、相手を尊重した協調的な対話の時間でもあった。」[(2)]と述べていて、協働による制作の工程が、対話やコミュニケーションを導き出している様子がうかがわれる。また寺川は「陶芸を使った共同的な創造活動は、美術授業ならではの感動を伴う生徒の人間関係形成力を高める体験であった。」[(3)]としていて、協働性を取り入れた陶芸授業の有効性について述べている。

筆者による今回の研究では、寺川らの研究を参考にしつつ、更に生徒間の協働という点に焦点を当て、授業題材の立案、実践、分析を行っていきたい。（原山）

３．実践１「Clay session －つながるやきもの」

３．１．実践に至る経緯

岐阜県多治見市にある岐阜県現代陶芸美術館では、3 年に１回のペースで「大地のこどもたち」という岐阜県内の小中学生を対象にした陶芸の作品展を行っていて、2020 年度には「大地のこどもたち 2020」展が開催された。筆者は審査員としてこの展覧会に携わった関係で、美術館の依頼を受け 2019 年と 2020 年の２回、展覧会の関連催事として小中学生を対象とした陶芸のワークショップを行った。2019 年のワークショップでは小学校１年生から中学校２年生までの 10 人が参加し、「いまの私の心の形」というテーマで、手のひらに乗る程度の小さいオブジェを数点作り、焼成した後、板に貼り付けて壁に飾る事ができる壁面作品を制作した。ワークショップの実施にあたっては筆者が担当する大学の研究室に所属する大学生６人が指導補助として参加した。本論文では次項で 2020 年度のワークショップについて述べたい。

３．２．2020 年度ワークショップの概要

2020 年度に行ったワークショップは、「Clay session －つながるやきもの」というタイトルで、協働の要素を

取り入れた内容を企画した。小学校１年生から６年生までの 10 人の参加があり、前年度同様に大学生６人が指導の補助をした。

ワークショップの前半は協働による制作のパートで、参加者全員の合作で横 180cm、縦 90cm の大きな「粘土の絵」の制作に取り組み、一旦完成とした後に、後半ではその「粘土の絵」を参加者各々に切り分けて個人の作品として皿に仕上げるという２段階の内容となっている。

前半の制作にあたっては、「花、人、ハート、車、文字など名前のある形を作らない事。」というルールに加え「グニャグニャ、ギザギザ、ニョロニョロ、フワフワなど名前のない形を組み合わせてどんな形ができるかな？」と説明をし、抽象的な表現を目指す事を示した。

また合作ならではの表現を目指す為、偶然という言葉について例を出しながら説明をし、10 人が思い思いにとった行動が積み重なる事によって、偶然性がもたらす思いもよらぬ作品を楽しみに表現する事とした。

前半では、まず初めに大きめに切った陶土の板を横 180cm、縦 90cm 大の合板に敷き詰め、ベースとなる粘土板を作成する。その上に色が異なる４種類の陶土を使って、紐状や球形、ちぎった形など、指導者の指示したテーマに基づいて様々な形のパーツを作り、思い思いに土台の上に配置した。コロナ禍の最中でのワークショップであり、参加者同士の接近を防ぐ為にパーツの配置をする人数は一度に２人までとし、ローテーションしながらパーツを置いて行く。初めは隙間が多くパーツを置く位置にも迷いが見られたが、配置したパーツが増え、絵柄の様に見えてくるにつれて参加者の発言も活発になり、絵柄全体のバランスを考えてパーツを配置するなど参加者同士のコミュニケーションも見られるようになった。絵柄のバランスや密度が程良くなった頃合いで、指導者が終了を宣言し、「粘土の絵」が完成した。（写真１）

写真１　完成した「粘土の絵」

次に、一旦完成した「粘土の絵」を、後半の展開に向けて、凹凸をならし、パーツをベースの粘土板に密着させる為、布を被せて参加者に足で踏んでもらった。

計画の段階では丸い木の棒をローラーの様に使って凹凸をならす事を予定していたが、指導補助をする大学生と共に事前に試してみたところ、凹凸をならす為には大学生であってもかなり力を入れる必要があり、小学生の力では難しい事が予想された為、足で踏む方法に変更した。参加者に靴を脱ぎ靴下のままで布の上から粘土を踏ませると、初めは恐る恐る踏んでいたが、徐々に不安が無くなり、足の裏で感じる粘土の感触に、「気持ちが良い」という声が多く上がった。（写真２）

写真２　布の上から粘土を踏む

写真３　踏んだ後の「粘土の絵」

ここから後半の内容に移り、この粘土の絵を 10 分割にカットをし、参加者に欲しい部分の希望を聞きつつ手渡した。参加者各々の創作意欲を妨げない為、ここから模様を足す事も可とし、各自が絵柄を足した後に丸く切り抜き、石膏型を使って皿の形に成形して終了した。（写真４、５）

写真４　型を使い皿の形に成形する

写真５　完成した皿（素焼きの段階）

３．３．2020 年度ワークショップを振り返って

今回のワークショップは、対象とする人数が多い学校現場と異なり 10 人程度の参加者を対象とした場での制作であり、内容の自由度が高かった為、積極的な協働の形態である合作による制作を試みた。以下に参加者のワークショップを通して見られた参加者の様子を記す。

本ワークショップの参加者同士はほとんど面識が無く、学年は小学校１年生から６年生までと年齢差もあった。作品作りにおける役割分担については特に話し合わなかったのだが、大きな絵をみんなで作るという共通した目的の中で、新しい表現方法を他の参加者に提案する参加者や、絵柄の少ないところを埋めて全体のバランスをとろうとする参加者が現れるなど、自然発生的に各々が自分なりの役割を考えていたのが見てとられた。

このワークショップの特徴は参加者が順番にパーツを置いてゆき、それが繰り返されて絵が出来るという点にある。これに対する参加者のスタンスについては、自分の順番の前に既に置かれたパーツの配置を見て考え込む参加者がいる一方で、対照的に置かれたパーツの事は気にせず思い切り良くパーツを配置する参加者もいた。

制作に臨む参加者の行動の全体的な傾向として、初めはアシスタント役の大学生に促されながら恐る恐るパーツを配置していたのが、配置されたパーツが増え徐々に絵柄の様に見えてくると、表情にも笑顔が見られる様になり、自ら積極的にパーツを配置する様に行動が変化してゆくのが見てとれた。（原山）

４．実践２「山をつくるー陶芸で表現する物語」

４．１．実践に至る経緯とねらい

本実践は、2018 年度から行っている奈良教育大学工芸研究室と奈良教育大学附属中学校美術科の協同授業を継続・発展させたものである。

2018 年度は、移動式陶芸窯を用いた楽焼の授業を計画・実践し、陶芸窯の設備のない学校における授業の構築を行った。2019 年度はその内容を発展させる形で、自作陶芸窯の楽焼制作から、自然物を用いて小さな箱庭をつくるという内容で授業設計を行った。この実践のねらいは、陶芸のもつ他者・他分野との結びつきを生み出すという特性を生かして、美術科における深い学びを実現することであり、陶芸を用いて中学校美術科における深い学びを創造するための授業設計の方法と、題材の設定について実践を通して検証・考察を行った。

これまでの実践で、中学校美術科において陶芸の特性を生かした多様な学びを含んだ題材開発が可能であること、深い学びにつながる授業設計の可能性を示してきたが、本研究では、陶芸技法による制作を継続しながら、2019 年度までと異なる視点から授業設計を行うことを考えた。

本実践のねらいは、一つに、先に原山が述べた、陶芸における「協働」を生み出す効果を授業設計に引用し、制作（表現）と鑑賞を関連づけた場合、どのような学びが生徒の内面に生成されるかをみるものである。本題材は、個人制作であるので、2.2 に挙げた寺川らによる研究にあるような作業的な「協働」は含まれないが、陶芸ならではの作業工程を共に行うことで、感じたことを共有したり共感したりして、「ともにつくり出す」という「協働」が生まれ、そこから生徒の対話を促し、学びにつなげることができるのではないかと考えた。

二つ目のねらいは、2019 年度に行った実践研究の展開として、陶芸を用いて中学校美術科における深い学びを創造するための授業設計の方法の異なるバージョンを蓄積しようというものである。これは、次のような考えに基づいている。

陶芸は、中学校１年生向けの教科書に「使いたくなる焼き物をつくろう」とあるように、デザイン・工芸領域で取り上げられることが多く、使いやすさや機能と美しさの関係などを考えることをねらいとする題材の実践例の積み重ねは進んでいる。しかし、陶芸という技法は、楽焼の器が実用品としてよりは、鑑賞の対象として価値を見出されてきたように、一つのオブジェクトとして成立する力を持つものでもある。陶芸をデザイン・工芸領域以外の視点から取り上げ、絵画や彫刻作品について行われている様に表現と鑑賞を関連させた実践例を蓄積することで、中学校美術科における陶芸の学びの幅を広げることは意義のあることではないだろうか。

以上のような二つのねらいを軸に授業設計を行った。次節において、その概要を述べる。

４．２．実践の概要

本実践は、附属中学校１学年４クラス（１クラス 32 ～ 33 名）を対象に、１学期（６月１日～７月 31 日）に行った。今年度はコロナ禍の影響で５月末まで休校となっていた関係で、１年生の入学後初めての対面授業として実施することとなった。

モチーフには身近な存在でイメージしやすく、かつ生

徒個々にとって発想の余地がある形として「山」を選択した。同じモチーフを作る事で共通の話題となり、かつ個々が形に込めた物語を語り合えるという事で、対話が促される題材であると考えた。また完成後には全員の作品を同時に並べ「山脈」という新たな見方をする事で、さらなる協働の展開も可能である。

題材名「山をつくる－陶芸で表現する物語」

題材の目標

（1）陶土や釉薬の持つ性質や質感の魅力･効果を理解し、意図に応じて工夫して表すことができる。

（2）自分だけの「山」の物語を考えることを通して表現したい主題を生み出し、創造的に工夫して豊かに表現できる。

（3）自分の作品と友だちの作品を集合として捉えたときに、造形的な良さや美しさを感じ取るとともに、自分なりの価値観を持って作品を語ることができる。

（4）陶芸の技法を知り、陶土の触感を感じながら楽しんで授業に取り組むことができる。

準備物

陶土、釉薬１０種類：透明、飴（薄茶）、織部（緑）、るり（青）、天目（濃茶）、乳白、青磁（水色）、黒、赤、黄）、石（2個）、粘土板、水入、スポンジ、ヘラ、バケツ、柄杓、たたら板、ＰＣ、電子黒板

題材全体の指導計画は表１の通りである。

第１次	導入・陶芸概論・制作内容の説明・アイデアスケッチ・物語を考える	（1時間）
第２次	成型・物語を考える 奈良教育大学で素焼き	（1時間）
第３次	釉薬掛け・物語完成 奈良教育大学で焼成	（1時間）
第４次	作品完成・鑑賞	（1時間）

表１　指導計画

４．３．実践の経過（第２次・第３次）

実践の経過について、まず第２次・第３次の制作の様子から述べる。第２次では、陶土を山の形に成型する段階を行った。生徒は、第１次の題材の概要説明で、見たことのない自分だけの「山」をつくること、その「山」には物語があり、その物語も考えることを知らされている。また、「山」をつなげたら何になるだろう？と「つながり」を意識させる問いかけを行い、学級全員の作品を一つの作品として捉える視点を示唆しておいて、題材を開始した。

まず、一人あたり３kgの陶土を配布し、基本となる形の成型を原山の指導に従って行った。陶土の３分の１を取り、新聞紙を丸めた上に被せ、逆さまになったお椀型の半円形をつくる。この基本形の上に、ヘラや生徒が自分で拾ってきた石などの道具を使って成型していった。同時進行で、「山」の物語を考えた。

第１次のアイデアスケッチの段階で「山」の物語を完成させなかったのは、陶土の冷たさや柔らかさ、水分を含んだ感じ、可塑性のある素材の見た目など、視覚と感触の刺激によって生まれる物語もあると考えたからである。生徒は、アイデアを浮かべるとその通りに作ろうとする場合が多いが、時に、そのアイデアが素材を生かしたものでなかった場合でも、アイデアに固執して制作が滞る場合がある。本題材では、手遊びのように土を捻ったり摘んだり丸めたりしながら、素材と対話しながらアイデアを深める場面を設定した。この場面によって、思考と創造を往還する動きが自発的に生まれると考えた。基本形を作るところまでは全員が同じ作業であるため、スムーズに進んだ。その後は、それぞれが自分のイメージする「山」を思い浮かべたり、陶土と遊んだりしながら制作を進めた。制作が進んでいる生徒にも、少しずつ進めている生徒にも、同様に机間指導の声かけとして「その山にはどんな物語があるの？」を常に行った。物語を考えてから作っている生徒は、成型方法にこだわる様子を見せ、まず土を触ってみることから始めた生徒は、偶然に出来上がった形から物語を生み出していた。（写真６、７）

写真６　持ってきた石で表面を叩き質感を作る様子

写真７　土を捻り出しながら造形する様子

第３次は、素焼した「山」に釉薬をかける段階である。この時間で、物語を完成させ、作文用紙に記入した。釉薬の種類は透明、飴（薄茶）、織部（緑）、るり（青）、天目（濃茶）、乳白、青磁（水色）、黒、赤、黄の 10 種類で、色の幅を多くすることで生徒の物語や造形に対する発想が実現できるように考えた。

まず、釉薬の掛け方と釉薬の概要について原山から説明を受けた。美術教室のスペースの問題と釉薬の量の問題があったため、学級を３グループに分けて順番に釉薬を掛ける作業を行った。生徒は、釉薬の色見本を見ながら、自分の「山」に合った色合いを考えていた。焼成前の釉薬は、実際の釉薬の色と異なるものが多いため、「本当に青くなるのか？」等疑問を口にしながら、選択していた。作業時は、手で作品を持って釉薬につける浸しがけや、柄杓で流してかける流しがけなどやり直しのできない初めての作業ということもあって、緊張した様子もあったが、楽しそうに作業を行っていた（写真８）。

写真８　釉薬を流しがけしている様子

４．４．実践の経過（第４次）

第４次は鑑賞の段階である。鑑賞は、まずペアになって作品を前に「山」の物語を語り合い、その後学級全員の作品を集めて、そこで考えたことを対話する展開で行った。美術教室のセッティングは、中央に机を集めて大きな島を作っておき、その周囲に机を円形に並べて椅子を向かい合わせに置く形とした。向かい合わせに座った生徒は、物語を語り終わると横にずれて新しいペアを作り、また物語を語ることで、複数の作品を観賞できるようにした。最後に中央の島に全ての作品を集め、生徒らの考えで並べ直して観賞を行うこととした。（図１）

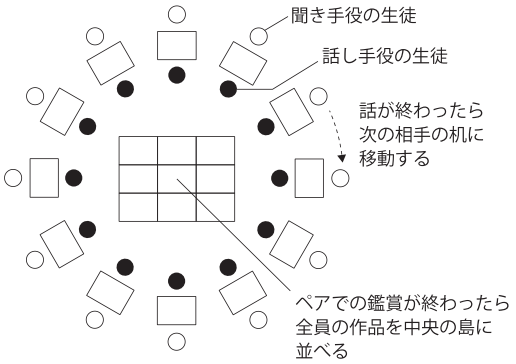

図１　第４次の教室配置図

ペアの鑑賞では、作品を、角度を変えて覗き込んだりしながら相手の物語を楽しそうに聞いている様子であった。物語は作文用紙に記録していたが、手元の用紙は見ずに物語を語るように指示をしたため、語る方も自分の作品を触ったり、物語に関わる部分を指さしたりしながら能動的に鑑賞を行なっていた（写真９）。

複数の釉薬を重ね掛けしている事から釉薬が混ざり合いながら流れている箇所が見られる作品もあり「溶岩が流れているみたいに見える」といった感想が聞かれたり、ゴツゴツとした作品の凹部に溜まった釉薬を見て「池みたい」という感想が聞かれるなど、釉薬に注目した発言も多く聞かれた。

写真９　作品を触りながら物語る様子

全体鑑賞は、学級によって並べ方が異なり、それに伴って、対話の内容も異なっていった。ある学級は、生徒から「背の高い順に並べよう」という声が上がり、円形になるように作品が並べ始めた。背の高さの違いを基準にしたため、似たような高さの作品になると、多くの生徒がかがみ込んで作品を見比べたり、口々に意見を出したりして、全員で作品を並べ終えた（写真 10）。並べられた作品を見ながらさらに対話を行った。

写真 10
作品を並べた様子 円形につなげて並べていった

生徒からは次のような発言があった。

「なんか山がめっちゃ繋がってるから、あの、断面図みたいなところ（半分に切られたような形の山の作品があった。筆者注）が入り口みたいな。なんていうかなぁ、守ってみたいな感じで面白いなあと思った」
「これ全部、これ全部奈良を囲んでたらカラフル、個性的で良かったのになあって」
「てことは、これは、あの、奈良県、奈良県や」
「うんうん」

対話のきっかけは筆者の促し（発言する生徒を当てた）であったが、一人の生徒が発言すると、次々に話が繋がっていき、友だちの発言に頷きながら聞いている様子が見られたり笑い声が溢れたりして、活発な対話となった。

４．５．「山をつくる－陶芸で表現する物語」を振り返って

本実践のねらいの一つは、陶芸における「協働」を生み出す効果を授業設計に引用し、制作（表現）と鑑賞を関連づけた場合、どのような学びが生徒の内面に生成されるかをみるものであった。「ともにつくり出す」という「協働」が対話を生み出したと思われたのは、まず、釉薬をかける第３次の展開の場面であった。

作品を掴んで釉薬のバケツに浸したりする工程では、浸した手が感じる釉薬の冷たさや、素焼きの作品に釉薬が染み込んでいく感覚など、日常では経験しない刺激があった。生徒らは、自分の感じた感覚などを友だちと共有しようと活発に話をしながら制作を進めていた。釉薬の色が焼成前とは異なることも、生徒の発言を活発にした。友だちの作業の様子を見ながら、釉薬を選んだり、かけ方を考えたりしている最中も、互いに対話しながら作業を進めている様子が見られた。

次に対話が生まれたのは、第４次の鑑賞の展開の全体鑑賞の場面である。全員の「山」が中央に集まると、作品に対して集中している雰囲気が学級全体に広がった。集まった作品の一つずつに注目して話をしたり、並べられた形から話が始まったりして、対話が始まるきっかけは教師の声かけであっても、そのあとは自然に対話が行われたという印象であった。

生徒の発言は、「山」の形や色、「山」の並び方から受ける印象からのものが多かった。美術科の教科性による「見方・考え方」は、作品や素材の持つ造形的な要素から感じたり考えたりすることで育成されるが、本題材の「山」は、その形の多様さや、釉薬の持つ独特の光沢を持った色合いが、生徒の想像力を刺激し、活発な発言につながったと考えられた。また、集めて並べるという動きが入ったことで、自分の「山」と友だちの「山」のつながりを目にすることになったことも、生徒の対話を促す要因になったと思われた。

本題材では、作業的な協働はなかったが、陶芸の制作作業にある特別な工程（土を切る、釉薬をかけるなど）や、鑑賞の形が、一緒に制作している友だちとの共感を生み、それが「協働」性の新しいパターンを生み出していると感じられた。また、対話を生み出すきっかけにもなっていた。このことは、今後の授業設計にも生かしていくことができるのではないかと思う。（長友）

５．研究の成果と課題

５．１．２つの実践を通じた成果

以上に述べてきた様に、協働の要素を取り入れた図画工作・美術科教育における陶芸題材開発として、２つの実践を行った。各実践の検証については、それぞれについて述べた章の中で行っているので、ここでは２つの実践を通した総合的な成果の検証を行いたい。

実践１の「Clay session －つながるやきもの」（以降、「clay session」と記載）は小学生を対象とした美術館におけるワークショップであり、作品制作自体を協働で行う、合作としての作品制作を主とした内容であった。実践２の「山をつくる－陶芸で表現する物語」（以降、「山をつくる」と記載）は中学校での授業実践で、作品制作は個々で行うが、鑑賞の段階で協働した展示を行い、自他の作品を集合として捉える「全体鑑賞」を行った。また鑑賞において、生徒同士の対話の機会を多く設けている。

これらの実践を通した１点目の成果は、協働によって新たな創造が喚起された点である。「clay session」の10 人による合作では、自分が何かを意図しても他の９人の行動により方向性は変わってしまう、その様な状況を徐々に受け入れ、自分の前に配置した人の表現を受けてそれを広げる様な意図を持つ様になり、タイトル通り10 人の参加者のセッションの様な形で作品が作られた。「山をつくる」完成した作品を中央に集めて並べる場面では、教員の指示ではなく、生徒間の自発的な対話の中からイメージを発展させ、学級毎に異なる並べ方が展開された。その後の鑑賞においても、作品個々についてだ

けでなく、複数の作品の関係性という要素が加わる事で、活発な発言が見られた。これらに見られる様に、協働によりアイデアが展開し、新たな創造が喚起されていった様子が見られた。

２点目の成果は、協働しての作業や対話を通じて「人間関係構築を促進する効果」が見られた事である。「clay session」では、前半の 10 人で１つの作品を合作する制作において、「新たなアイデアを考える役割」「配置のバランスをとる役割」など、偶然集まった参加者の中に、自然発生的に役割ができていった様子が見られた。「山をつくる」の鑑賞の授業では、ペア鑑賞という形で、お互いに作品に込められた物語を説明し合うのだが、作品という自分の身代わり的な存在を対話の中心に置く事で、対話が促進される様子が見受けられた。これらに見られる様に、創作的な協働活動が人間関係の構築を促進する効果が感じられた。

３点目の成果として、「足の裏で土を感じる体験」や「手が感じる釉薬の冷たさや、素焼きの作品に釉薬が染み込んでいく感覚」といった「未知の感触の体験」を学習者同士が共有する事が、会話による共感を生み出し、協働を活性化させる上で有効である事が分かった。

学校現場で協働性を美術・図画工作授業の題材に取り入れる場合は、成績をつける際の参考とするためにも、最終的に個人の成果物が出来上がる事が望ましいが、そういった面でも実践１、２共に学校現場において実現しやすい形の題材であった事も４点目の成果として挙げられる。

５．２．課題と今後の展開

図画工作や美術の題材開発は、たとえ魅力的な題材だったとしても、本当に実現できる題材なのか、１回だけでなく毎年継続的に実施できるのかという点が問題となるであろう。ただでさえ学校現場で陶芸を行う場合は、粘土や釉薬の準備、そして焼成する窯の有無など、準備にかかる手間や、設備の有無といった条件があり、実現できる環境にある学校は多くはない。

本研究における実践例について考えると、「clay session」は学校ではない場でのワークショップであり、参加者の人数は学校の平均的な１クラスの人数と比べるとかなり少ない。また指導者側には補助をする大学生がいて、実際の学校の現場と比べると、指導者側の負担が少ない条件での実践であった。また「山をつくる」は、実際の中学校での授業実践であったが、大学教員が材料の準備等や焼成において補助的な役割を果たしており、これも一般的な学校現場とはやや異なる状況である。実践１、２共に一般的な学校現場の授業として行うには、教員側にとっての省力化の工夫や、多人数への対応が必要であると思われる。例えば、実践２「山をつくる」では今回は 10 色の釉薬を用意したが、これだけの釉薬を準備するのは実際の学校現場では難しく、５色程度が現実的なところであろう。しかし、この様な合理化は行き過ぎると題材の魅力を損なう事にもつながるので、注意する必要がある。

ただし、「clay session」についてはワークショップの現場にいた複数の教員経験者からは、興味深い題材であり、自分も授業でやってみたいという感想が聞かれるなど、実現性は低くない題材である。また「山をつくる」においても、ペアでの作品鑑賞は第２筆者の長友が本実践以前から通常の美術科授業に既に取り入れている手法であり、それを協働の要素を取り入れ自他の作品を集合として捉える「全体鑑賞」へ発展させたものである。対話を活性化させる教員の技量が求められるものの、条件的には実現するのが難しくはない手法であり、どちらの実践も一般的な教育現場で活用できるものだと言える。（原山）

６．おわりに

最後に教育面での研究という観点を少し離れ、表現者としての観点からの筆者の考えを述べたい。

第２章で陶芸分野における協働の事例を挙げたものの、「美術大学」という西洋の個人主義的な美術感が色濃い場で陶芸を学んだ筆者は、やはり陶芸制作は個人において完結すべきであるというイメージを強く持っている。これは筆者に限らず、現代の日本の美術界全般が持つ価値観であるだろう。

近年、筆者は第２章に挙げた様な海外のシンポジウムに参加する機会が数回あり、海外の陶芸家との交流が多くなるにつれ、陶芸における協働についてもっと考えるべきではないかという問題意識を持つ様になった。特にタイでのシンポジウムの際に、イギリス人陶芸家が現地の陶芸家（大学教員）と学生のチームワークの良さに驚き、その理由を尋ねたところ、「アジア人は稲作文化の影響で協働する事が習慣になっている」と現地の陶芸家が答えていた事が印象に残っている。この様な経験から、教育現場に限らず表現者の立場としても、アジアから発信する新しい美術の可能性として、美術表現への協働（コラボレーション）性の導入という事に注目をしている。

今回の研究成果を踏まえ、今後も「教育現場における効果」と「表現としての可能性」という視点を往還しながら、多角的に美術における協働の可能性について探って行きたい。（原山）

付記

1）　本研究は、令和２年度（2020 年度）奈良教育大学「次世代教員養成センター・プロジェクト研究」（研究代表者：原山健一、研究課題：「繋がり」をテーマにした陶芸題材の研究としての採択を受けて推進したものである。

2） 本研究の推進にあたっては、奈良教育大学美術教育講座工芸研究室ゼミ生諸君の協力を受けた。ここに記して謝意を表したい。

参考文献

原山健一・長友紀子（2019),「自然との関わりを取り入れた陶芸授業の開発 －中学校美術科授業における深い学びを生む陶芸題材を目指して－」, 奈良教育大学次世代教員養成センター紀要 , 第 6 号 , pp.33-41

前﨑信也（2015）,「五条坂に残る粟田口の登り窯 ―安田家と京都陶磁器合資会社」, 元藤平陶芸登り窯の歴史的価値等調査研究報告書 , 京都市 , https://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/cmsfiles/contents/0000182/182621/honnpenn.pdf（参照日 2020 年 11 月 20 日）

寺川剛央･衣斐哲臣･飯村浩晃･藤田絵理子（2018),「中学校美術・陶芸授業における共同学習の取組 －人間関係形成力促進を目指した大学教員等との協働の試み－」, 和歌山大学教職大学院紀要 学校教育実践研究 No3 2018, pp.123-127

「美術 1 出会いと広がり」, 日本文教出版（2016）

引用文献

1） 寺川剛央･衣斐哲臣･飯村浩晃･藤田絵理子（2018),「中学校美術・陶芸授業における共同学習の取組 －－人間関係形成力促進を目指した大学教員等との協働の試み－」, 和歌山大学教職大学院紀要 学校教育実践研究 No3 2018, p.123

2） 同　p.124

3） 同　p.127